



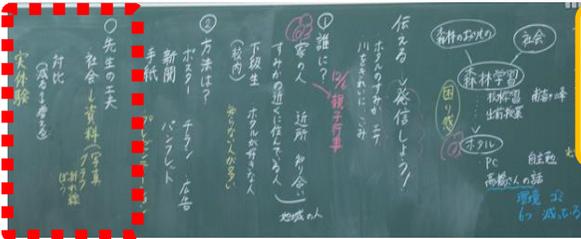
発行 令和元年11月12日(火)
高知市教育委員会
学校教育課 学力向上推進室
公開授業の案内や申し込み・レポートは、
高知市教育委員会 学校教育課のHPをご
参照ください。他のレポートも多数掲載！

「能力ベース」で単元を描くー単元の板書記録からー

第5学年 単元名：光れ 飛べ 横内のホテル ～地域の人に伝えよう～
教材名：「資料を生かして考えたことを書こう」(東京書籍5年)

【本単元で付けたい力】 写真や図表・グラフ等の資料から情報を読み取り、目的や意図に応じて資料を関係付けて活用し、自分の考えが伝わるように説得力のある意見文を書くこと。
【設定した言語活動】 保護者や地域の人に、「横内のホテルを守る」ための意見文を発信する活動。

本時までの単元の記録ー毎時間、単元で育てたい「資質・能力」(赤い囲み部分)を明確にするー



一時間目

プレゼンテーションの教師モデルからこれからの学習の見通しをもつ。



二時間目

資料の共通点と相違点を整理することによって特徴や効果をつかむ。



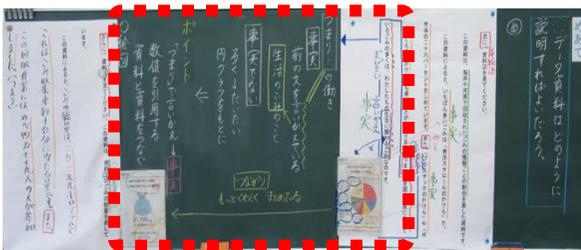
三時間目

説得力のある意見文を書くための効果的な構成をつかむ。



四時間目

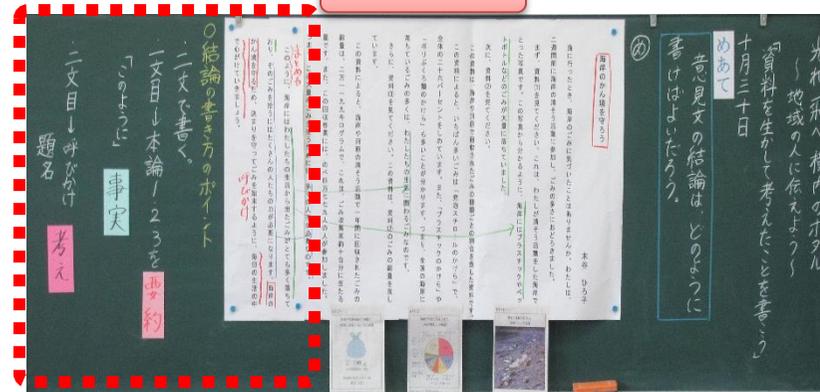
写真資料を活用した説得力のある説明の仕方をつかむ。



五時間目

データ資料を活用した説得力のある説明の仕方をつかむ。

本時の板書



☆ 本時は、教科書教材から意見文の「結論」を書くポイントを見つけ出し、自分自身の意見文の「結論」を書くことに生かすという提案である。三つの本論を一文にまとめたり、題名や伝えたいことを取り入れて自分の考えを詳しくしたりして書く。そのために、「結論」部分と既習の「題名・序論・本論」部分とを関連付けて読み、その関係性を言葉で説明できる力が必要となる。(言葉と言葉の関係付け)

「言葉による関係付け」と「系統」がポイント

協議2 学習活動の「質」の向上

「書く」「話す・聞く」など、表現する活動の場の設定と時間の量的な確保が必要である。また、「書き方」「話し方」など「できる」ための表現技術を獲得する手立てが大切である。

協議2 「見方・考え方」を鍛える

国語科では、言葉と言葉、対象と言葉を関連付けて言葉で表現する。この時、既習の事柄を基に未習の事柄へと学びをつないでいくので、「系統」の確認が不可欠である。

参会者の感想

- ❁ 国語科として学ぶべきことを明確にし、「言葉による見方・考え方」(資料と言葉、言葉と言葉の関係付けと言語化)が、子どもたちが見て分かるように、常に可視化されていることが、とても参考になった。
- ❁ これまで、単元をつくる際に、相手・目的意識には目を向けるが、「意図」の持たせ方が弱かった。「意図」を意識させることによって、子ども自らが学びのPDCAサイクルを回すことができるようになっていきたい。

横内小学校の提案に対する講師の指導・助言

1 「説得力」とは？

小学校で学習する「説得力」の持たせ方には、①教科書の教材文から見付け出せること、②自分の意見の実現性とその効果を考えること、③資料の根拠・理由・順序を検討すること、④反対意見への反論の仕方を身に付けること、の四つがある。これらを6年間の「系統」の中でどのように組み込んでいくのかを考えることが大切である。

2 なぜ「意図」が必要なのか？

単元を通して、相手意識・目的意識はもたせているが、自分自身が「〇〇のために・・・を伝えたい!」という子どもたち一人一人の思いや願い、考え=「意図」への意識が弱い授業が多い。自分ごとの「意図」をもつことにより、学びはより「本気」になり、持続し、高まっていく。



講師：松永 立志 先生
(前鎌倉女子大学 准教授)

3 「個のめあて」を質的に高めるには？

「個のめあて」を質的に高めるには、自分の「意図」を反映しためあてをもつことが大切である。「個のめあて」が自分のものであればあるほど、「振り返り」が書きたくなり、その質も上がる。同時に、自分自身のPDCAを回す「自己調整力」も育ってくる。

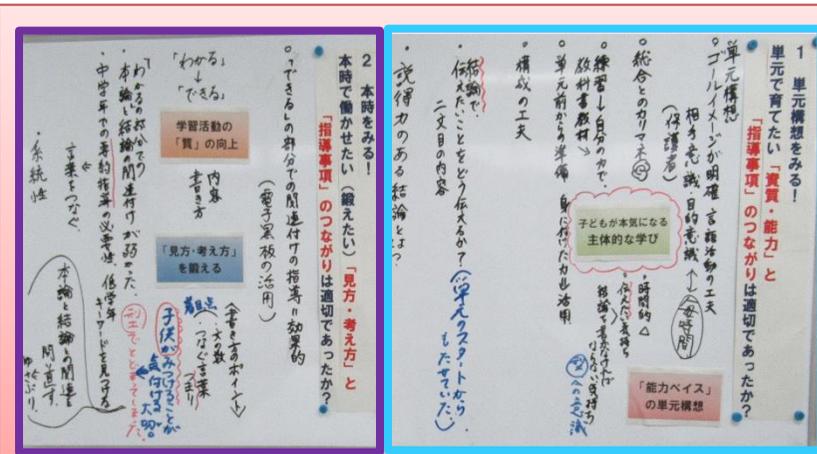
育てたい「資質・能力」と「言語活動」がポイント

協議1 子どもたちが本気になる主体的な学び

「相手意識」「目的意識」「伝えたい意図」の明確な設定により、子どもたちにとっての学びの必然性や意欲を生む工夫を行う。カリキュラム・マネジメントによる単元開発も必要である。

協議1 「能力ベース」の単元構想

教えるべきことはしっかり教え、思考させたり使わせたりするべきことは、使いこなせるまで繰り返す。「わかる」で終わらせず、「できる」まで粘り強く積み重ねて、言葉の力を育てる。



研究協議で出された意見

授業者の振り返り

子どもたち自らがまずやってみて、「もっとこうしたい」「どうやったらできるかな」という問いをもち、その自らの問いを解決し続けられる単元開発や構成の工夫が大切だ。子どもたちの主体性や伝えたい「意図」に働きかけるためには、単元のつくり方に対する自分自身の発想の転換が必要であることを学んだ。



横内小学校 島崎 雄 教諭